

中国文学及び日本文学

——西洋人の研究方法について——

ジョン・ティモシー・ウィツクステード

今日はお招きいただきまして、有難うございます。この場で話をさせていただくのを大変光栄に思っております。

戸倉教授によりまして、中国や日本の学者がここで話をする機会が多いものの、西洋人はほとんどないということです。欧米の中国専門家たちを代表するつもりはありませんが、私独自の「ケーススタディ」の話をさせていただいて、一個人の中国文学と日本文学の研究がどのようなものかを少しでもお伝え出来ればと思っています。

まず、私がいつ中国語と日本語を勉強し始めたか、興味を持ったきっかけ、そしてどのくらい中国語圏や日本語圏で過ごした経験があるかなど、簡単に私の東アジア学の履歴からお話ししましょう。

次に、私の研究してきた分野の概要をお話したいと思います。一見、私は全く違う分野の研究をいくつかやってきたように見えますが、それは互いに大いに関連があるのです。そして最後に、現在私が取り組んでいる研究について若干述べたいと思います。

「中国や日本に興味を持つようになったのはなぜですか。」と聞かれると、私はいつも「約四十年前高校生の夏に、ヨーロッパのオーストリアへ交換留学生として行ったのがきっかけです。」と、ちょっと意外な返事をします。当時、私はドイツ語しか話さないオーストリア人の家にホームステイをしていました。そのオーストリア人の家庭は、第二

次世界大戦直後の一九四五年から一九五五年まで、ロシアの占領下にあった地域に住んでいました。

その後、カナダのトロント大学の学部学生として、初めの二年間はヨーロッパ言語と文学を専攻していました。ドイツ語、フランス語、スペイン語、ラテン語、そして、ヨーロッパ史を勉強していました。そんな勉強が私はとても好きだったのです。しかしその前のオーストリアでの経験から私は西洋の領分を超えたいと考えるようになったのです。大学のコース案内を見てみると、「中国語」とか「東アジア史」という文字が私の目に入るようになりました。そして「これこそ自分に対する挑戦だ」と思ったのです。「自分に対する挑戦である」というのはほとんど四十年を経た今でも変わりません。その後の三年間、私はトロント大学で中国語と日本語、そして、それに関連した東アジア文学と歴史の授業をとりました。

翌年、スタンフォード大学で修士課程を過ごし、その後一九六六年から一九六八年まで台湾と日本に一年ずつ滞在して、はじめて東アジアで生活をするという経験をしたのです。一年台湾で暮らし、次の年は東京で過ごしました。四畳半の下宿住まいをし、毎日銭湯に通い、喫茶店で勉強しました。喫茶店というのは、冬は暖かく夏は涼しく、おまけに日本語の練習にはもってこいの場所でした。

その後オックスフォード大学で博士課程の二年間を過ごしました。そして一九七〇年から一九七二年までオックスフォードの論文を書く一方、京都大学の人文科学研究所の研修員として二年間勉強をしました。約三十年前のことです。

博士号を取得した後、一年間ミシガン州立大学で教え、一九七八年からは現在までずっとアリゾナステート州立大学で教えています。

京都に留学していた時以来、この二十八年間で一九八四年から一九八五年まで台湾に一年、あわせて数週間程度の中国への短い旅を三回、それから十四年前と九年前の二度、それぞれ四ヶ月の日本滞在をのぞけば、今回まで東アジ

アで過ごす機会はほとんどありませんでした。

それでは、私の研究分野のお話をしていきたいと思います。研究分野は、中国の詞、宋時代と六朝時代の詩、伝統的な中国の文学批評、中国文学と日本文学の関係、日本における中国学、そして、日本の近代文学、とくに森鷗外に分けられます。もちろん、これはどれひとつをとっても、非常に大きな分野で、私はそれぞれのほんの限られたものしかやっておりません。しかしその研究方法は、お互いに相通じるところがあります。欧米で東アジアを研究している学者のほとんどは、もつとはつきり線引きのできる分野の研究をしています。たとえば宋の歴史とか、儒学とか、江戸時代のフィクションなどというようなものです。私の研究方法というのはちよつと違います。ひとつの分野を二、三年あるいは四年かけて、集中的、徹底的にやり、その後は、数年間休眠状態にしておき、他の分野をやります。そうすると、何年か後でまた「新鮮な気持」でそこに戻り、もつと掘りさげて取り組むことができるのです。

今日は四冊の本をご紹介しますと思います。三冊は私が書いたもの、一冊は翻訳をしたものです。この研究室に寄贈いたしますから、興味のある方は、あとでゆつくりご覧下さい。今は私の話に必要ですので、講演のあとお伺いいたします。

まず、詞について、私の研究してきた事からお話したいと思います。三十五年前スタンフォード大学の修士課程にいたとき、修士の研究テーマは、伝統的な中国の詩か詞についてやりたいと漠然と思っていましたが、どの分野的にしよつたらよいか分かりませんでした。西洋では詞初期の研究はほとんどなかったこと、またスタンフォードでの修士論文には注釈つきの翻訳が必須だったことから、私は「花間集」の韋荘をとり上げることにしました。当時手に

入った中国語、日本語、ヨーロッパ語すべての文献で、「花間集」について読み、「花間集」に収められた韋莊の詞四八篇を翻訳し、序と脚注と文献目録をつけました。私は、「花間集」の五〇五篇すべての詞を読みましたが、やっていくうちに博士論文に韋莊などはもう取り上げたくないと思うようになりました。「花間集」のテーマの狭さがいやになったのです。韋莊の詞の大部分は「婦人の部屋」の歌ともいうべきものです。あとでお話する「韋莊の詞」という本の中で、私はそこに共通するテーマと雰囲気をも、次のように紹介しました。

美しい婦人たち、愛する人の去り、あるいは今まさに別れゆかんとする時、瀟洒な部屋、冷たい寂しい床に身を横たえ、悲嘆にくれている。灯が一つ、傍らに一枚の屏風、玉籠の鸚鵡の如く、過ぎ行く時に身を委ねる。春爛漫、まさに過ぎ行くこうとする時。蠟燭の細り、微かに漏刻の滴る音。鶯が更け行く夜、明けんとする朝を告げる。富の証に囲まれても、その恋は満たされない。そのやるせない絶望に外を眺めれば、目に映る情景は春今まさにその盛りを過ぎ、遊蜂花の間を舞い、草は青々と繁っている。

さて、次は十二年とんで、一九七八年にいきます。私は韋莊についての修士論文を書きなおし、出版しようと思いましたが、中国語も前よりずっと力がつきましたし、英語の原稿を改訂しようと新鮮な気持ちでやり始めたことではずみがつき、私は以前の原稿に大幅に手を入れました。これは一年後に *The Song-Poetry of Wei Chuang* (836-910 A.D.) 「韋莊の詞 (836-910 A.D.)」として出版されました。簡潔、明快な感じが、四八篇の詞が英文対訳されています。中国語の原文は、アリゾナステート州立大学の同僚である Eugenia Y. Tu 杜麗珍 (Du Yangzhen) に毛筆で書いてもらい、詞の翻訳の注解とヨーロッパ言語と日本語への翻訳に対する目録と文献目録が添えてあります。

次に、また話は十年後に飛びますが、韋莊についての私の本が出版されたために、詞についての学会に参加するよう誘いを受けました。その時、私は一石二鳥を狙ってみようと考えたのです。それは、李清照と西洋のフェミニスト文学理論を関連付けたテーマについて書くことで、それまで私がいまだ知らなかったその二つの分野が分かるように

なるいい勉強だと思ったのです。私は特に、フェミニスト理論を李清照とその作品にあてはめてみた時、それがいか
に役に立つかを知りたいという興味にかられました。学会は一九九〇年に開かれ、その報告書は一九九四年に出され
ました。その中で発表した私の論文の題は、『李清照の詞：ある女性作家とその評価』(The Poetry of Li Ch'ing-chao:
A Woman Author and Women's Authorship) というものでした。

このテーマについて研究していくと、その論文に書いたように、いくつかのことが明らかになってきました。李清
照が、女性特有の繊細な典型的詩人であるという見解はきわめて新しいものであり、李清照のはじめの結婚が理想的
なものであったというのが通説とされるようになったのは、死後四〇〇年以上も経ってからのことです。李清照が女
性であったという点は、後の多くの文学批評家に注目されているところで、それを否定的にとっている人たちもいま
すが、もつと驚くべきことは、李清照が広く詞人として女性はもちろん男性からも崇拜されていたという点です。実
際、アイロニックなのですが、李清照は文字通り、宋詞の zong (patriarch) 祖といわれているのです。しかし、こ
の誉め言葉は両刃の剣であって、「詩」に対して、「詞」はかなりの部分「女性向きの」、「もうひとつの側」、「女性
側」のものであると言う見方をすれば、よくも悪くも解釈できるものです。李清照がきつと強い並々ならぬ女性だっ
たであろうというのは、その「詞」よりも、「詩」と周知の生涯から窺い知るところが多いと思われます。この研究
中、私は「全宋词」、「全金元詞」にある女性詞人による詞をすべて読みましたが、その時代の女性詞人の中に、また
そのジャンルの詩体の点からも、同様の「女性の声」と確認できるものは何も見つからなかったのです。実際、李清
照を詩人の手本とする後世の女性詩人は少なかつたし、まして自分が人間として目標とする人だと考える詩人はめっ
たになかったといつていいでしょう。

この李清照についての論文を書きながら、私は、蘇軾、柳永、辛棄疾、呉文英の詞を読み、「花間集」とくらべ、
宋時代の詞というジャンルの優れている面をはじめてある程度鑑賞できるようになりました。

それでは次の話、私の博士論文のテーマ、元好問に行きましよう。私はその作品の主要な部分である、文学批評をとりあげました。元好問には、論詩の詩三連といくつかの散文作品があります。この研究の結果出版したのが、この本『Poems on Poetry: Literary Criticism by Yuan Hao-wen (1190-1257)』[論詩の詩：元好問 (1190-1257) による文学批評]です。この本では、元好問の三連の論詩の詩を三点から分析しています。すなわち、(A) 彼の表現の視点は何か、(B) 彼の見解は前代のどの批評を基にしているのか、(C) 自分自身の詩的表現に先人のどんな散文あるいは詩を典型としているかの三点です。詳しく説明してみましよう。元好問は非常に難解な詩人です。なぜかといいますが、その表現は前代の伝統を多分にふまえていて、非常に含蓄が深く、きわめて初歩的な段階、つまり、表面上の意味を理解するだけでも困難だといつても言いすぎではありません。元好問の表現にはほとんどが、直接の言及ではなくても、少なくとも前代の作品と響き合うところや重ね合わせた部分があるのです。つまり、それは元の詩の形を変えたもうひとつの作品と言えるかもしれません。

元好問のいわんとすることを理解するため、私は、王韶生、陳湛銓、何三本、王禮卿など元好問の詩についての詩(すなわち論詩の詩ですが)に関する当時手に入れられる限りの注解を使いました。また、一連の「論詩の詩」で元好問が使っているすべての表現を十二冊の concordances 用語索引あるいは用語参考文献、たとえば「佩文韻府」でチェックしました。私のこのような参考文献を使うやり方、とくに中国の学者が使わなかった「漢詩大観」を使う方法は、元好問の前代の詩人、特に宋時代の詩人に関連した言葉の使い方、語法の例をいくつか掘り起こすことになったのです。それらはこれまで注釈者の誰もが見落としてきたものです。更に、元好問の詩の注釈に対する finding list 資料検索目録を編みだしました。このような方法はすべて、その作品の理解を深めるのに役立ちました。また元好問が独自の詩的言語を生み出す上での詩人を頭に描いて祖述していたかの判定に大変有効だったのです。

中国の文学批評の歴史から言えば、元好問の一連の論詩の詩は杜甫や戴復古にはじまる伝統を引き継ぎ、更に飛躍

させていったものです。翻って、元好問は、方孝儒、王士禎等だけでなく、頼山陽にまで受け継がれていきました。元好問の三連の論詩の詩は、詩人たちの個々の詩を *intensive* (集中的) に本質に導く事が出来、一つの題材をいくつかの詩で取り扱う事によって、*extensive* (外延的) にならしめることも出来たのです。つまり、三連の論詩の詩によって、裏づけのある討論、あるいは議論といったものが可能になったといえます。

元好問は自身の詩の中で、彼を遡ること一〇〇〇年の詩を取り上げています。ですから、曹植、孟郊、王安石など、彼が取り上げた詩人の批評の歴史を知る必要もあります。そのために、私は、郭紹虞、羅根澤、張健らによる、標準的と見なされている中国文学批評史だけでなく曹丕の「典論論文」、鍾嶸の「詩品」、劉勰の「文心雕龍」、空海の「文鏡秘府論」といったものをとおして、中国の文学批評の古典的な作品を熟知する必要があります。鍾嶸の「詩品」は元好問の文学批評理解に非常に重要なもののなので、私はその八十%の翻訳を博士論文の補遺としてつけることまでしました。これは実に難しい仕事でした。

元好問を理解するために、元好問以前一〇〇〇年の詩とその批評の歴史を知るが必要であるなら、死後七五〇年にわたる彼の詩に対する注解の歴史をよく知ることも必要です。当時、この詩人についての学問研究すべてを知るために、中国語、日本語、ヨーロッパ言語で書かれたものを網羅して、私は、元好問の詩についての *finding list* 資料検索目録を作り始めました。その結果が、後に出版されたこの *A Finding List for Chinese, Japanese, and Western-Language Annotation to and Translation of Poetry by Yuan Hao-wen* です。まず、元好問の詩を一から一三六六まで通し番号をふり、彼の詩の二つの通行本(四部備要版と表朝枢本)を対照させ、それから、表の形で、中国語、日本語、ヨーロッパ語でどの学者がどの論文の正確にどのページでどの詩を扱っているかを示しました。一一五の本あるいは論文をこのように分析しました。言うまでもなく、これは大変役に立つ資料索引です。たとえば、表朝枢の通行本によると、施国祁の注釈の再版には、元好問の詩#010は「杜曲」という言葉についての脚注が、ただひとつ

あるだけです。しかし、私のこの資料検索目録を見ても、十四の項目を参照する事が出来ます。A、B、Cは中国語の資料で、ギリシャ語の α 、 β 、 γ がついているのは日本語の資料、①、②、③がついているのは西洋言語で書かれている論文です。つまり、この詩に関してその十四篇の研究論文が詩#010を扱っているわけで、中には、この詩の解明のために大変重要になるものもあります。

一九七六年に私はオックスフォード大学の博士論文として、七百ページをこえる元好問の文学批評に関する研究を書き終えました。そのときは、もう何年も研究していましたが、当然、そのテーマに飽き飽きしていて、その後六年間、元好問は休眠状態にしておきました。六年たって、私はまたその問題に取り組み、新鮮な気持で八ヶ月の間、出版のための改訂をしました。

この本は、元好問の「論詩の詩」三連を取り上げています。「論詩三十首」の#011首を例として取り上げてみましょう。ここでは、A. 中国語の原文、B. その英訳、C. 更に (Hyper-literal) 超字義通りの翻訳、D. 中国語のローマ字表記、そして、一番重要なE. それぞれの詩すべてにエッセイを、長さにして五から十ページほどですが、載せるという体裁をとっています。エッセイでは、詩は次のような点から、展開、解析、解釈がなされています。つまり、その意味、それ以前の詩人の批評と、自身の詩を形成する詩的表現のために使われた用語、それ以前に著された批評の歴史、そしてそれ以後のさまざまな解釈の歴史という観点です。引用した作品はすべて英訳し、中国語を原文通り巻末に載せました。(書は、これもまた、アリゾナステート州立大学の同僚、杜鵬珍によるものです。)

この本のはしがきに書いていますが、私は読者に、まず元好問の詩を中国語で読み、それからその二つの英訳、次にエッセイを読み、また戻って原文と翻訳を読むという方法を勧めています。こういう方法ではじめて、元好問の論詩の詩の真の意味がわかると思うのです。

また、文献目録に加えて、本の中で取り上げている用語の索引と、人名、本のタイトルの索引があり、両方とも役

に立つと思われる。台湾では、海賊版が出ています。

今日は、はじめに、ひとつの研究がどのように次につながっていくかをお話ししましたが、元好問の研究はそれから、いろいろな出版物へとつながっていきました。前にお話した、元好問のための資料検索目録も、鍾嶸の「詩品」の研究も元好問の研究から発展していったものです。「文心雕龍」も重要ですが、鍾嶸の「詩品」は、もともとずっと重要です。というのは、中国において初めての具体的評価の本だからです。劉勰が、全般的により理論的に述べているのに対して、鍾嶸は詩人に対して十分な評価をしており、元好問は「詩品」の中で使われた用語に大きく影響をうけているからです。

一九七九年にアメリカで行われた「中国の芸術理論」という学会のために、私は「詩品」について論文を発表しました。それは後に、一九八二年「The Nature of Evaluation in the Shih-p'in (Gradings of Poets) by Chung Hung (A. D. 469-518)」¹⁾「鍾嶸 (A. D. 469-518) 『詩品』の評価方法の特徴」として、改訂され出版されました。その中で、私は鍾嶸の作品を、評価をする上で、より普遍的な理論として、とくに一般的な芸術の評価にあてはめられるのではないかとという観点から考察を試みました。私は西洋の文学理論について膨大な読書をして、この西洋と中国の二つの流儀に共通なものがあるのではないかと、そして、西洋流の方法には「詩品」を説明できるものがあるのではないかと、いう点を理解したいと考えていました。この議論はここで要約するにはあまりにも時間がかかります。この論文は、鍾嶸の業績の概略を示し、異なった視角を示していると思います。

鍾嶸につながっていった元好問の研究は、今度は、日本の「古今集」の序へと私を向かわせました。後に、日本の文学理論の歴史を読んでもみると、西洋の日本研究者たちのほとんどは、この仮名序と真名序という二つの序が、特に仮名序ですが、いかに後世の日本の詩歌にとって大事であるかを十分認識してはいるものの、どれだけ中国の原型に

影響を受け、それを模倣しているか、また、いかにその原型と違っているかを知らないかということがわかったので。また中国の背景、出典、文脈について、日本の日本文学研究者たちの理解は弱いように思えました。たとえば、私は、植田誠の「日本における文学と芸術理論」という本を読んで、紀貫之の章の大半は間違っていると思いました。更に、日本の学者も西洋の学者も、「古今集序」を比較文学や詩学理論 (poetics) に入れようとした人はありませんでした。私は M. H. Abrams が編み出した、「文学理論分類」または、「批評理論を類別する方法」を用いて、文学理論の中で「古今集序」がどのような位置にあるか正確に見定めてみようと思いました。そして、このような作業に基づき、「古今集序」がいかに中国の文学作品を裏付けにして説得力を強め、自らの批評的記述を権威あるものとしていったか、また漢詩と対向して、和歌の価値を確立していったかを指摘しました。

この結果、The Kokinshu Prefaces: Another Perspective 「古今集序のもうひとつの見方」という論文が生まれ、幸い好評を博しました。当時アリゾナステート州立大学に「古今集」の全訳をやり終えようとしていた同僚がいましたが、そこに私の論文の短縮版が加えられたのです。この短縮版は、後にスペイン語にも翻訳されました。そして元の原稿はつい昨年、ある古今集研究叢書の一部として、再版されました。

私はその論文を明快な英語で書くこと、そしてその論旨をより明確にすることに力を入れようと思いました。多くの文学批評家が使っているような、少なくとも西洋ではそうですが、難解な言葉を見せびらかすような表現は、やめようと思いました。更に、私は中国文学と日本文学の両方を心から愛する者として、「古今集序」が中国の手本を拙く吸収したものであるとけなしたり、あるいは多くの日本の学者のように、その日本らしさを主張するあまり、ことさらに愛国的になる必要ありませんでした。実際、私が「古今集序」について述べたほとんどは、いまでも私は言うまでもないことだと思っていますし、少なくとも中国文学理論を少しでも知る者にとっては、あきらかなことであると思います。あきらかなことというのは、それがうまく言えてさえいれば、読者にすんなり理解されるものでしょう。

元好問から、興味がわいて、私がやった次の研究は、吉川幸次郎の「元明詩概説」の翻訳で、英語のタイトルは *Five Hundred Years of Chinese Poetry, 1150-1650: The Chin, Yuan, and Ming Dynasties* です。私がこれを英語にしようと思ったのには、いくつかの理由がありました。まず、それが、どの言語でもその時代の詩を広く扱った唯一のものであったこと、Burton Watson がすでに吉川教授の「宋詩概説」を英訳していたこと、「宋詩概説」と「元明詩概説」は、Zheng Qingmao によって、中国語に翻訳されています。」そして、第三の理由は、私が自分で中国の詩と日本語をもっと勉強するいい方法だと思ったからです。

私はその時はひとつの言語をほぼ完璧にもうひとつの言語に翻訳することが、どんなに苦しく、難しいか全然分かっていなかったのです。ましてこの「元明詩概説」特有の問題の難しさなどまったく考えもしませんでした。難しさのひとつは、吉川先生が引用した中国語の一五〇篇の漢詩自体です。原文は訓読で「示されている」だけで、きちんと日本語に翻訳されているわけではないところが多いのです。（また、Zheng Qingmao の訳もその引用された漢詩をそのまま転載しただけで、近代中国語に翻訳していないわけです。）

もうひとつの難題は、吉川先生の散文を適切な英語にすることでした。私のこの翻訳本に対する書評によれば、その面でこの翻訳はとても成功しているということです。吉川先生の本は、好著ではあるが、とくに優れた研究ではないと私は考えています。しかし、誰もやっていない手付かずの分野を扱ったものであるという以上になぜ私がこの本を賞賛するのか、それには、二つ理由があります。大概の中国学の研究書と違って、吉川先生は読者の興味をそそるように書いていること、もうひとつは、エッセイストとしての先生の日本語の文体が関係しています。私は、この本の訳者はしがきで次のように書きました。

吉川幸次郎の著作はまた、異なつた種類の平衡感覚、文体のそれを表している。日本人の中国古典学者の多くが、（実際ほとんどが、）自分の母国語で明瞭に伝えるというよりも、読者に自分の博識をひけらかさうという意図が

うかがえるような日本語、とくに学問的な中国語の合成語を多用した、仰々しい日本語を書いている。もつとも、西洋でもギリシヤ語的、ラテン語的英語を書く古典学者などには、ほとんど、あるいはまったく説明ぬぎで、専門外のインテリの読者にほとんど理解できない専門用語を次から次へと引用する人がよく見られる。

反対に、現代の読者が理解できるように、わかりやすい自然な現代日本語をつかう中国学者も多い。それがうまくいけば、その結果は立派といえる。しかしともすると、それは非常にくどく、冗長になりがちである。漢詩一行の五文字が日本語に翻訳されると三行もの説明文になってしまう。そしておまけに、同じような脚注もつくことになるのである・・・

吉川幸次郎は、そのどちらのタイプでもない。中国学の標準からみれば、特に簡潔な現代日本語を書き、時々適切だが現代の読者にはなじみのない中国語の名文句をちりばめる。そのほとんどの文章がきわめて短く、所々に長い文章が入れられ、時に絡み合い、複雑きわまる文章になる。そのとりあわせが滑らかな調子を生み出すのである。読者に内容はもちろんのこと、読むこと自体を楽しんでほしいという意図が明らかにうかがえるのである。吉川の文体は、決して冗長ではない。どちらかといえば、まったく反対に簡潔すぎるくらいがあると言える。一言でいえば、心地よい文体のバランスをついているのである。

吉川幸次郎が、日本でまったく専門外の知識人の間で高名なのは、その洗練された文体の読みやすさに負う所が多いのである。

ここで、私はちよつと話題を変えて翻訳について少し思うところを述べてみたいと思います。韋荘の詞、元好問の論詩の詩、そして、吉川の本に引用されている漢詩の英訳が示すように、どんな翻訳も翻訳であるのみならず、それは、形をかえた解釈なのです。なかには原文の曖昧さ、漠然さ、意味の多重性をそのまま適切に伝えている訳文もあ

るにはあります。しかし、私の恩師であった、William Hung 洪業 (Hong Ye) は、「詩は全体として一貫性がなければならぬ」とよく口にしていましたし、それが彼の持論でもありました。翻訳を見て、「Zusammenhang はどこにあるのですか。」と、ドイツ語の言葉をよく使いました。つまり、「何が、この詩に一貫性を持たせているのですか。」と。Zusammenhang がなければ、詩はただ言葉の連なった紐にすぎないということです。真の翻訳はまた解釈でもあります。ですから、これが、中国人や西洋人は難しい中国語の作品の日本語訳を読むことが大切だと私が思う理由のひとつですし、中国人や日本人が、欧米語へ翻訳された中国語の作品を読むことも同様に重要なのです。

それと同時に、次のことも付け加えて述べておきたいと思います。何か自慢しているように聞こえたらお許しただきたいのですが、私の強みといえるのは、英語がよく書けるということです。文学を議論する際、すべては、いかによく書けるかが決め手ですし、翻訳の場合にもそれが最低条件になるのです。

翻訳の場合は、何よりも「適切に書く」ということが大切です。どんな翻訳でも二つの言語がかかわっています。「翻訳元」と、「翻訳先」となる言語です。私の場合、中国語、日本語が、「翻訳元」、英語が「翻訳先」の言語になります。しかし、その二つがどんな言語であつても、また、誰が翻訳をしようとも、翻訳先言語への翻訳は、意味だけでなく翻訳元言語の語調と文体も伝わらなければなりません。公文書であれば、翻訳も公文書らしくとのえなければなりませんし、やさしく、心うたれる愛の歌であれば、翻訳もまたそのようであればならないのです。「西遊記」のあるくだりにあるような、ちよつとみだらな一節は、どんな言葉に翻訳しても同じように伝わらなければなりません。古代中国の「伝奇」小説のこなれていない文章も、翻訳後の文章にその雰囲気留めていなくてはならないのです。それが私の持論です。

吉川幸次郎の文章と取り組みながら、私は、英語で適切に同じような文体、同じような調子を創り出そうとしました。これは非常に難しいことで、それには四つのことが必要です。今例に挙げているのは英語の場合ですが、翻訳先

がどんな言語でもこれは同じ事でしよう。まず、(A) 広範な英語の読書をしていること、私の場合これはやっています。次に、(B) 英語を書く経験を積むこと、練習なしでうまく書けるようにはなりません。さらに、(C) 英語のリズム、英語のスピーチレベル、英語の語源に対して鋭い耳を持っていること。(英語は所謂ロマンス系の言語とチュートニック系の言語の二つの流れから出来あがったものですから、私の昔やった、ロマンス系言語つまり、ラテン語、フランス語、スペイン語、そしてチュートニック系言語のドイツ語の素地がここで生きてきます。)そして、最後は、(D) ただひたすら一生懸命やることです。(私はどんな論文あるいは翻訳でも、少なくとも六回、普通十回以上書きなおしをします。)

私より中国文学、日本文学に造詣の深い欧米人の専門家たちはたくさんいます。私よりはるかに中国語、日本語を知っている欧米人はたくさんいます。そして、私よりずっと上手に中国語、日本語をしゃべることの出来る欧米人はたくさんいるのも確かです。しかしあえて言わせていただければ、私より英語をうまく、あるいは適切に書ける人はほとんどいないと思っています。私の強みといえるのは、次の二つだけだと思います。一つはこの書く技術でしょう。もう一つは、「詩品」あるいは李清照の詩を独創的に分析することが出来るということだと思います。

ちよつと、ここで一言言わせていただきたいのですが、私の経験からいえば、欧米人の多くが、また、もつと多くの日本人、中国人が、翻訳をするとは一体どういうことなのかについて、非常にうぶで、知らなさ過ぎると思っています。ほとんどの中国人は元好問の作品を読むだけの学問的基礎がありません。これは、たいていの西洋人が、きちんと勉強しなければChaucerやMiltonを理解できないのと同じことです。まして多くの中国人、日本人が自分たちの言葉から英語に訳されたその翻訳の技術を判断できるほどの英語力は全然ありません。私の経験から申し上げますと、中国人、日本人のほとんどが機械的に、欧米語に訳されたものを自分たちの言葉と一語一語照らし合わせるようなやり方をしています。重箱の隅をつつくような細かいところにこだわって、もつとずっと大切な調子、文体、リズムなどはかまわず、それらを完全に無視したやり方をしています。ですから、彼らのその翻訳についての意見は、大抵の場

合無知と尊大さがあらわに見えています。

一九七二年私が京都を離れるとき、吉川先生の「元明詩概説」の翻訳は八〇%の原稿ができていました。しかしそれから、それに再びとりかかり、やり終えるまで、十五年が流れました。これは結果的には大変幸いだったのです。長い中休みの後、私は新鮮な気持ちでまたその仕事にとりくむことができ、以前には出来なかったようなやり方でそれを改訂する事が出来たからです。初稿の完成間近もしくは完成時と、出版のための書き改めの最終原稿を書き始めるまでに要した年月に注意してみてください。韋荘についての本に十二年、元好問の本に六年、そして「元明詩概説」の翻訳には十五年もあります。これが、構想をあたためている貴重な発酵の過程だと私は思うのです。このような研究は非常に難しいので、それを完成させるためには、「息継ぎ」とも言うべきものが必要なでしょう。十分な中休みをとった後では、はるかによい改訂、書きなおしが出来るのです。

次の話に行きましょう。京都で元好問の論文と吉川先生の翻訳に没頭していた二年間のおかげで、アメリカに帰ってから、私は、中国学専攻の大学院生に日本の中国学資料を二、三時間で紹介するよう二度依頼されました。これがきっかけとなって、私は日本語の中国学に関する資料をもっと整理発展させてみようと思いついたのです。

日本の中国学資料は、領域を特定しないと主な参考文献を挙げるだけでも膨大なもので、私は三巻にまとめることを思いました。ひとつは学者別、もうひとつは学問分野別、つまり、中国史、中国文学、中国の法律など、そして、三つ目の分類は王朝別すなわち、時代による区分です。これは要するにひとつの大きなケーキを三通りに切るようなものです。ご承知のように、既存の参考文献の大多数は、いずれもこの学者別、分野別、時代別という三つの軸のどれかにあてはまるのです。

私は、この仕事のために、一年間の助成金を得ることが出来ました。膨大な資料を集め、準備ノートや、インデッ

クスカードを、三巻すべてについてつくり、第一巻は [Japanese Scholars of China: A Bibliographic Handbook / 日本の中国学専門家ハンドブック] となりました。しかし、その後はその仕事を続ける資金に恵まれませんでしたし、今、十年以上もたつてみると、もうそれを続ける気はまったくありません。労多くして、益少なしといったところでしょうか。(西洋では、文献目録といった学問は下に見られる傾向があるのです。)

ちよつと紹介させていただきたいと思いますが、この本は、二十世紀の日本人中国学学者一、五〇〇人以上の情報を網羅しています。「日本における東洋学論文目録」、これは、三五年も前に出版されたものですが、この著者索引に一〇、〇〇〇人近くの名前を載せているのは、収録基準を考える必要があるということでしょう。それにくらべ、このハンドブックへの収録基準は、非常に実用的なものでした。というのは、この本は、「中国文学専門家辞典」と嚴紹璽 (Yan Shaotang) の「日本の中国学家」に載っているすべて、(さらに、鄧嗣禹の文献目録に掲載されている多くの人たちの索引として使えます。(また、このハンドブックは、嚴紹璽の本の中の多数の日本人学者の名前の読みの間違いを訂正しています。)) このハンドブックには、その三冊に載っている学者は別として、次のような中国学専門家も含まれています。(A) 日本の中国学者、別に出版された目録にその論文が載せられている人、(B) 全集のある人、(C) 献呈された論集のある人、(D) 追悼文のある人、(E) その本が英語、またはその他のヨーロッパ語に少なくとも一冊全訳されたことがある人、という人たちが含まれています。ですからおわかりのように、今は故人となつてしまった学者、あるいは少なくとも十五年前に活躍していた学者が主で、したがって、現在の東大の中国学の先生方の中には、その当時は若すぎて名を連ねていない方もあるかもしれません。

ひとつの例として石田幹之助の項目を手短かに見てみましょう。石田幹之助の項の横に石田の専門分野の簡単な紹介があり、その下には Yen 394 とか Teng # 142 とあります。これは、石田が嚴紹璽の本では三九四ページに、鄧嗣禹の目録では一四二番にでているということです。その下、「國學院雜誌」と「史叢(日本大学)」の前のプラス印

は、石田の業績の目録を示しています。「日本古書通信」の前の星印、アステリスク(*)は、石田の業績の簡略目録を示しています。また、「古代文化」から始まるその他八つの項目についている黒点(・)は、石田の文献、人柄について、またはその分野の資料を示しています。というのは本人の同僚の追悼文、弟子たちによる恩師の思い出文、恩師の業績などを語る座談などが載っています。ギリシャ文字φは、Festschrift、つまり二つの論集が石田に献呈されたということを示しています。どちらにも石田の論文が参考文献として載せられています。一冊目はあわせて二十八ページで、二冊目は三ページから九ページにわたって載っているという事を表しています。それぞれの論集の叙述個所の最後に「TRNS #014」、「TRNS #015」とあるのは「東洋学論集内容総覧」(一九八〇年出版)掲載番号を示しています。もうひとつのギリシャ文字 ε は、EnglishのEの反対の形ですが、英語あるいは英語以外のヨーロッパ語での著作を示しています。ここには二つありますが、初めのは、石田の著作目録、後のは、石田について書かれたものを示しています。

見ておわかりのように、このハンドブックは、論文や論文目録そのものを掲載しているわけではありません。どこを見ればその論文や論文目録その他があるかを示しています。

巻末には、八つの索引があります。一つは、ハンドブックに載っているすべての日本人の苗字が中国語読みで並べられています。(これは中国人と西洋人に大変役に立つのです。)他の索引は雑誌名の漢字、かな書きと出版社のリストです。それから、分野別の索引もあります。これも大変重要なので、利用者に研究方向の指針をあたえるのに役立つかも知れません。

興味がおありでしたら、ハンドブックのはしきをお読みください。ここには収録人名の収録過程、編集にあたって参考にした資料、使用された省略形とシンボルマークの説明、それからこの本の最大限の利用方法などがわかりやすく書かれています。

今日最後の話は、森鷗外の翻訳文学についてです。これは、私が現在取り組んでいるテーマです。多分ご存知と思いますが、鷗外の作品の優に三分の一は、翻訳です。彼は、Goethe, Byron, Heine, Ibsen, Kleist など、日本に紹介し、それが、日本の近代小説、戯曲、詩歌の発展に大きな影響を及ぼしました。その翻訳の九十%以上は、ドイツ語の原文、または、ドイツ語に翻訳されたものからの翻訳で、残りは中国語からです。

鷗外を研究していると、また昔の興味が戻ってきました。ひとつは、「古今集序」でとりあげたような、日中文化交流の接点です。鷗外と中国文学の関連で、私が興味を覚えるのは次の四点です。A) 鷗外自身作の二三篇の漢詩、B) 鷗外が訳し、私が吉川の訳本でその一部を翻訳しなければならなかった高啓の「青丘子歌」、C) 私のアメリカの大学で日本語の授業の教材として取り上げた、Hanshanと Shide をモデルにした鷗外の重要な短編、「寒山拾得」、そして D) 鷗外のもうひとつの小説との関連で、李清照について書いている時、私がその詩を全部読まなければならなかった Yu Xuanji 「魚玄機」です。

鷗外について研究を始めてみると、また別の昔の興味がもどってきました。鷗外の翻訳作品のほとんどがドイツ語から、あるいは、ドイツ語に訳されたものであるということから、私のドイツ語、ドイツ文学に対する興味が再び沸いてきたのです。昔の恋人とでもいってしまうか、若い頃大学で研究を始めた頃の分野です。私はずっとドイツ語で Goethe の *Faust* 全編を読みたいと思っていました。日本語訳は二十何種類あり、ある特定の箇所についてその中の六つの最近の翻訳をチェックしながら、鷗外の日本語への翻訳全部を読み、ドイツ語でも読みとおしたのです。また鷗外が日本語に翻訳し日本に紹介した Rike, Hofmannsthal, Lessing といったドイツの作家たちを調べていくうちに、私は、ふたつの文化の伝統を更に深く知るようになってきています。こんな勉強が私は好きなのです。

と同時に、この研究は私が教えてきた翻訳の理論と実践、もっとよく知りたいと思っている、ポストモダン文化理論にかかわる事でもあります。翻訳理論について言えば、鷗外の Hans Christian Andersen の「Improvisatore

(The Impromptu Poet) 即興詩人」の翻訳と Faust など他の翻訳は、翻訳の両極端のどこに位置するのでしょうか。つまり、字義通りの訳と自由訳、忠実な訳と翻案、誤謬と正確さ、そして、翻訳元の文体と翻訳先の文体をどううまくからみ合わせているのでしょうか。また、transgression 逸脱、transparency 透明性、contestation 論争、appropriation 専用、そして hegemonic center vs. subaltern periphery 支配的中心対副次的周縁性といったポストモダンの概念が、鷗外の作品にどれほど適当な分析道具の役割をしているのでしょうか。このように、鷗外の研究を通じて、私の研究してきた関連の分野がまた束ねられてくるのです。

最後に一言申し上げますが、今日お話したことの大部分は私が少なくとも十年前に研究したものです。二十年以上前のものもあります。質問がおりだと思えますが、特定の細部に関する質問にお答えするのは難しいと思います。資料は私の頭の中ではつきりしておりませんし、日本語でお答えしなければならぬという問題もあります。今日お話したことに何かご興味を持たれましたら、まず、私の書いたものを読んでくださいませんか。それから一緒にコーヒーでも飲みながらゆっくりお話が出来ればと思います。いかがでしょうか。

本日は、このような話をさせていただき大変嬉しく思いました。お忙しいところおいいただき、御礼を申し上げます。ご招待いただき光栄でした。有難うございました。

Dr. John Timothy Wixted : 一九四二年生。アリゾナステート州立大学アジア言語学科教授。一九九九年八月十六日より二〇〇〇年八月十五日まで、国際交流基金の援助を受け、中国語中国文学研究室外国人研究員として研究にあたった。ここに収録する講演は、二〇〇〇年五月二十二日、中文研究室において行われたものである。